



ウランバートル

水を求めて往復1時間 子供たちの厳しい“日課”

世界銀行タスク・チーム・リーダー 鎌田卓也

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



モンゴルの首都、ウランバートル市では、水を買うに行くのが子供や主婦の日課になっている。市内のゲル地区と呼ばれる貧しい地域では、水道が各家庭に行き渡っていないためだ。

水を買うのは、こんな手順だ。ポリタンクや酪農用の牛乳缶を手から10〜30分ほどの給水所まで歩く。行列のあと係員にホースで水を出してもらおう。一回に買うのは15〜30リットルほど。メーターに従って1〜3円程度の料金を払い、手に提げたり手押し車にのせて帰途につく。一見のどかな風景だが、楽な仕事ではない。零下30度になるモンゴルの冬は、こぼれた水が一瞬にして凍るので、転ばぬよう大変な注意がいる。また、道悪な急坂を、30キログラムの水を運ぶのは厳しい労働だ。

政府や各国援助機関、NPOがさまざまな水道プロジェクトを行っているが、困難は山積み。都市計画なしに拡大してしまったゲル地区では、水道管を引くのに巨額のコストがかかる。貧しい住民には敷地内に水道を引く費用や水道料金は大きな負担だ。バラックのような家では水道凍結を防ぐのは難しく、下水処理をどうするかの問題もある。子供たちが水運びをしなくても済む日を願いつつ、各分野のプロの知恵を集約した解決策が求められる、そんな風景だ。(写真は平井智子)